子どもの大好きな
「ごっこ」あそび。
これは想像力を養う
とっても大切な遊び。

森は舞台

～空想力・想像力～

①

②

③

空想力は、想像力と創造力のために。

絵本の世界は、子ども達が最も入り込みやすい空想の世界です。それに、森林が少なからず出てくる絵本はとても多いので、**森林に遊びに行ったときにはすぐに絵本の世界にとけ込んで、空想の遊びが始まります。** Point1 子ども達は森林に走っていくと、ササの葉っぱを耳にしてウサギに変身して跳ね回ったりします。オオウバユリの種を初めて見た子ども達は「これはお猿の小判だよ」と教えられ、「森ではこれがお金なんだって」「お金がこんなにたくさんあった！」と嬉しそう。素朴な空想の遊びは、**普段から読み聞かせている絵本から広がります。** Point2 「森の中には道を教えてくれるババが住んでいて『あっちゃいけ、あっちゃいけ』と言うらしいよ（やまなしもぎより）」と、絵本のことを思い出させてあげると、**風がササを揺らすのを見て「あっちゃいけ、あっちゃいけ」と、ババが言っている。** Point3 と、その場所に近寄らなかったり、「神社があるから、あの大きな木の根本には穴があるよ」「3人のお化けに会えるかな？」（めっきらもっきらどおんどんより）と、**絵本の主人公になりきって** Point4 遊びます。

もっとレベルが高くなると、子ども同士で**役割を決め、絵本の物語を演じ始めます。** Point5 そうなると森は小さな舞台に早変わりです。子ども達が**絵本の世界に入り込む** Point6 には、日頃からの絵本の読み聞かせと、声のかけ方がポイントです。「かんたが吸い込まれた大きな樹を見つけに行こう！」「ババが『あっちゃいけ』と言っていたからこの道はやめようね」と、上手に子ども達のお気に入りの話を活動に取り入れると良いでしょう。

この活動の流れ

活動	声のかけかた
：導入： 出かける前のお話　写真① 絵本は森林で読み聞かせてあげても良いと思います。	子ども達の間で一番ホットな絵本を読んでから出かけましょう。
：本体： 森林での遊びの中で、子ども達から自然に絵本の遊びが出てくると、そこをひっぱってあげることができます。 写真②③	森林では、子ども達が絵本の世界に入りやすいように、絵本の中の言葉を使って話しかけると良いかもしれません。 遊びが始まったら、子ども達に役を振っても良いでしょう。 でも、演劇のように決まった役柄を押しつけないよう配慮します。同じ登場人物が二人いても三人いてもいいじゃないですか。

：発展：
なりきり遊びになれてきたら、実際に舞台のための演劇仕立てにしてもよいかもしれません。子どものやる気があれば、そのまま学芸会へ。

ここがポイント！

この活動の環境教育的効果はここにある！

Point 1
絵本の世界にとけ込んで

→空想力

子ども達はいつも空想の世界をそばにおいて遊んでいます。森林は、最も空想の世界に引き込みやすい環境のひとつでしょう。

Point 2
絵本から広がります。

→心の容量

普段から絵本を読み聞かせることが大切なのは、子ども達が空想する心の容量を広げておけるからです。

Point 3
風がササを揺らすのを見て

→自然への畏怖

絵本は、自然というものが内包する未知や、不思議や畏怖の心をかきおこすことができます。育てられた空想の力は自然に対する尊敬の念も生みます。

Point 4
絵本の主人公になりきって

→役割と表現

役になりきるごっこ遊びは幼児期特有の遊びですが、その遊びを通して社会での役割を学んだり、プレゼンテーションを身につけたりします。

Point 5
絵本の物語を演じ始めます。

→コミュニケーション能力を育くむ

子ども達が自然と役割を分担し、その物語を演じ始めます。同じ役が複数人いたりしますが、非言語を含む高度なコミュニケーションが見られます。

Point 6
→思いやりの心

絵本の世界に入り込む

空想遊びをすることは想像力を育むために大切です。想像力は地球の裏側の紛争の事を考えたり、隣の友達の心の内を思いやったりするために大切なのです。

この活動の環境教育的な要素

森林について	心身の発育について	心のエコロジー
好きになり大切にする	感覚と感性を育む	コミュニケーション能力を育くむ
知識と観察力をつける	身体能力を育む	多様な価値観を育む
自分とのつながりに気づく	好奇心を育む	主体性や自尊心を育む

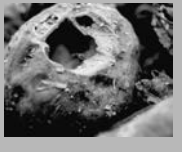
その他　空想力　心の容量　自然への畏怖　役割と表現　思いやりの心

幹爺さんの森のはなし

その⑩

この歯形はだれがしら？

森の中でクルミを食べるのは、リスさんとネズミさんたち。森の中でこんな穴あきのクルミをみたらヨ～クみてほしいのじゃ。ここにはこれをかじった生き物の歯型がついている。ちいさなクルミについたちいさな歯型。これはネズミさんなのじゃ。



クルミの実は中くらいの梅ぼしくらいの大きさじゃ。穴のふちに何本もついている筋がかじり跡じゃ。そうめんよりも細いぞよ。冬、雪の下でネズミさんはたくわえたクルミを食べている。食べかすは、おそうじしないよ。ちゃんと土になってまたクルミを育てる。うまくしたものじゃ。土に戻らないゴミは出さんようにしなくてはいかんな。

もりのレシピ

Recipes from Forest

森林に遊びに行ったとき、
色んな物を持って帰ることがあります。
それは、森林からいただく、大切な宝物。

ドングリや草花で何かを作ることは、
森林と自分が
「つながっていること」
を意識するために
とても重要なこと。
ここでは森林の材料で作る
レシピをご紹介します。

こういった「作り物」は、
「まとめの活動」に最適ですし、
おやつや工作など、
自分の楽しみな物にすると、
森林に何度でも行きたくなる
上手な仕掛けになりますよ。

Recipe 1

柴刈りでやきいも

ざいりょう

さつまいも　　アルミ箔
濡らした新聞紙
みんなで集めた枯れ枝、落ち葉、薪or炭

1. 柴を焚き、熾(おき)をたくさんつくる
   熾(おき)は薪が燃えつきて炭のように
   なっている状態のこと。

2. おいもは下ごしらえする
   たき火をしている間に
   すませておくとよい。
   ①濡れた新聞紙でくるむ
   ②それをアルミ箔でくるむ

3. おいもを焼く
   熾(おき)の合間にいれていく。
   20分くらいで中まで柔らかい、食べ頃の焼き芋になる。

4. たべる
   柴刈りの現場まで持っていって
   食べると、次の柴刈りの活動へ
   もつながりやすい。
   森の手入れのお話もしてあげる
   と良い。

※注意：雪害の枝を公園で拾う時は、あらかじめ
許可をもらう。大抵は快く許可をくれる。
また、焼き芋をするときは、消防署に連絡を。
これもたいてい許可をくれる。

Recipe 2

春の草を食べる

ざいりょう

フキノトウ（もしくはヨモギ）少し
白玉粉　水
シロップ（砂糖水）ザラメでも可

○フキノトウ白玉団子

1. アクをぬく
   フキノトウは一昼夜
   水につける。

2. 刻んでお団子に
   アク抜きしたもの
   を刻んで白玉粉に
   混ぜ、お団子を作る。

○ヨモギ白玉団子

1. アクをぬく
   塩または重曹を入
   れた熱湯でゆで、
   水に一時間さらす。

2. すりつぶす
   細かく刻む。
   ミキサーでもよい。

3. 刻んでお団子に
   アク抜きしたもの
   を刻んで白玉粉に
   混ぜ、お団子を作る。

○その他

○ ホットケーキ
フキノトウとヨモギは、アクをぬいた
あとホットケーキに。

○ タンポポの葉
ゆでて一晩水にさらすと苦味がとれる。
その後、ゴマ和えやみそ汁の具に。

○ 天ぷらうどん
オオバコ、ギシギシ、ヨモギ、タンポポ
は、天ぷらにして天ぷらうどんにすると
おいしい。

Recipe 3

森の造形あそび

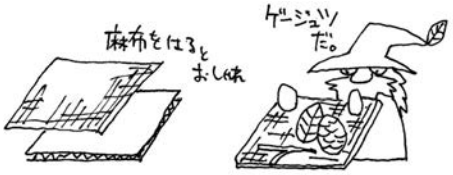
ざいりょう

拾う：木の枝、松ぼっくり、どんぐり
　　ナナカマドの実、クルミ　など
準備：段ボール（20cm角に切っておく）、
　　麻布（あれば）ボンド、おしぼり

1. 材料を拾ってくる
森林では材料はたくさん落ちているが生きているものは取らないように注意。乾いているものが工作しやすいですよ。

2. 材料を分類して保管する
分類することは、そのまま生き物の識別能力を育てます。何より工作する時にとても便利。

3. 台座を作る
台座は麻布を貼るとおしゃれに見えます。でも、台座が必要な訳ではありません。大きな松ぼっくりに適当につけて立体に作ってもOK。



4. かざりつけ
松ぼっくりやどんぐりで好きなようにデコレーション。心の赴くままにボンドでくっつけていきます。いつのまにか、素敵なオブジェのできあがり。ボンドはしっかり乾かしてから持ち帰ります。

Recipe 4

どんぐりだんご

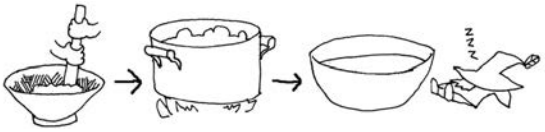
ざいりょう

どんぐり（たくさん）　白玉粉　上新粉
ザラメ（砂糖可・少量の水で溶かす）
水　ササの葉

1. 虫入りどんぐりを除く
水に入れると、虫の入ったどんぐりは浮いてくるので、それは捨てます。

2. 皮をとる
二つに割って竹楊枝で中をほじくりだす。ちょっとずつちょっとずつ。食べられるまでためるのはたいへんなことです。

3. アクぬき
すりつぶして煮ては水を換え、煮ては水を換える。最後に一晩水にさらす。



4. 混ぜる
白玉粉を耳たぶの固さにこねて溶かしたザラメとどんぐりを入れてさらにこねます。

5. 蒸す
これも子ども達と集めたササの葉を使って15分くらい蒸して完成です。

Recipe 5

草木染め

ざいりょう

採る：フキノトウ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ、栗、ドングリ、ヨウシュヤマゴボウ　など季節の草花
準備：ステンレスかホーローの鍋、コンロ、ボール、箸輪ゴム、ミョウバン、布（さらし）

○素染めをしよう

どんな植物でも色が出ます。
まずは出てくる色を素直に楽しみましょう。

1. **染め草とさらし**
   染め草とさらしを両方、鍋でぐつぐつ煮ます。

2. **洗う**
   軽く水洗いして干します。
   しっかり洗いすぎると
   色が落ちてしまいます。

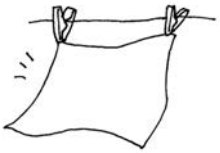
※模様を入れる
布を縛ったり、輪ゴムで止めたり、箸ではさんだり。できあがりを想像しながら止めていきます。煮たり媒染している間、取ってはいけません。最後に洗うときに全て外し、できあがりを初めて確認します。

○媒染もしてみよう

媒染はミネラルと色素の化学反応で
布に色を定着させる作業です。

1. **染め草とさらし**
   染め草を煮出して色が十分に出てからさらしを入れます。
   さらしは事前に薄めた豆乳につけておくと良く染まります。
2. **媒染**
   次は媒染（定着）です。ミョウバンを溶かした水でさらに煮ます。

3. **洗う**
   洗って干しましょう。媒染は発色を良くし、色持ちが良くなる効果があります。



○かけ染め（花びら染め）に挑戦

媒染染めでは出すのが難しい赤や紫の色を簡単に楽しめます。ヤマゴボウなどは、あまりに鮮やかな色が出るので驚きますよ！

1. **染料出し**
   ヤマゴボウの実やブドウの皮、花びらなどの赤、紫の色素は煮ると色を失ってしまいます。少量の水を使って揉み出し、色素液を取り出します。このとき、お酢を少し使うと定着の効果が多少あります。

2. **布の処理**
   模様を入れるために縛ったり、ビニールテープを貼っても良いでしょう。

3. **染色**
   取り出した色素液をスプレー容器などに移してそのまま布にかけます。

4. **干す**
   布を解いて広げてそのまま干しましょう。
   洗うことはしません。

部屋の中の森林

―木のおもちゃの教育的効果―

昨今注目を集める「木のおもちゃ」
いったい何が優れているのか、
そこにどんな教育的効果が隠れているのか。
おもちゃと子どもを見つめてきた
長谷川敦子さん（ＮＰＯ法人北海道子育て支援ワーカーズ）
に、お話を聞いた。

おもちゃの世界のセンスオブワンダー

「おもちゃにもセンスオブワンダーがあると思うんですよ」

ＮＰＯ法人北海道子育て支援ワーカーズの代表理事である長谷川さんはそう話した。良いおもちゃは、子どもが「これ、どうしてだろう」「すごいなあ」と、思いを寄せる余地がある。それは、野外の森林で遊んだときに得られる様々な発見と室内において良いおもちゃに出会い、遊んでいるときに得られる発見には、子どもの目からすれば、そこに差は無いということだ。つまり、森林で遊ぶ子どもと部屋の中で、良いおもちゃで遊ぶことと、様々な発見や五感を使った探索という面においては同じような価値があるのだろう。それは、一見シンプルで退屈そうなおもちゃで、子ども達が非常に長いこと遊んでいる姿を見かけることで理解できる。そのおもちゃで遊んでいる子どもは、例えば音であったり、例えば動きであったり、そこに現れる発見に夢中になっているのだ。その反応は、ＴＶゲームのように、様々な刺激に溢れていてエキサイティングだが、ゲームの中のストーリーをクリアしてしまうと、見向きもされなくなってしまうおもちゃと明らかに異なる。

「良いおもちゃは寡黙だと思うんですよ」

良くできたおもちゃは子どもからアクションを起こさなければ反応しないし、その間（ま）はゆったりとしていてじっくりと遊ぶことが出来るのだと言う。確かに、せわしなく自ら動いて働きかけ、子どもの感情が入り込む余地のないおもちゃが、今の子どもの世界にはあふれている。それは、じっくりと時間をかけて遊ばなければならない子ども達に、強すぎる刺激と焦燥を与えてしまうのだろう。確かに、ＴＶゲームはすべてのお膳立てがされていて、子どもが入り込む余地はない。遊ぶと言うよりも遊ばされるという言葉が似合う。

木のおもちゃは良いおもちゃか？

良いおもちゃを定義するためにいくつかの項目があるという。それは、良い音であったり、カラフルな色であったり、壊れにくいことであったり、良い動きをするものであったりする。木のおもちゃは、それらの項目によく当てはまるらしい。総じて、木のおもちゃは良い物が多いという印象にもなるのだそうだ。「良いおもちゃ」としてクローズアップされることの多い木のおもちゃにはそんな背景があって良識ある保護者や、幼稚園などの施設には要望が高い。しかし、ハンドメイドであったり個人の工房で生産するクラフトマンが多いこともあり、木のおもちゃは往々にして高価で手に入りにくいし、購入できる場所も少ないと言う。もっと良いおもちゃと子どもが触れるために、公共施設などで購入し、開放することも望まれる。

木のおもちゃは、他にも金属やプラスチックと異なった魅力がある。それは、音や手触りの温かさだ。そうした感覚の中で育てられた五感は、おそらく優しい感性に育つだろう。そして、木のおもちゃは壊れにくい。何十年も、世代を超えて愛着を持って使い続けることが出来る。これは、環境問題の解決や、日本が育んだ木の文化を守ることにもつながるかもしれない。

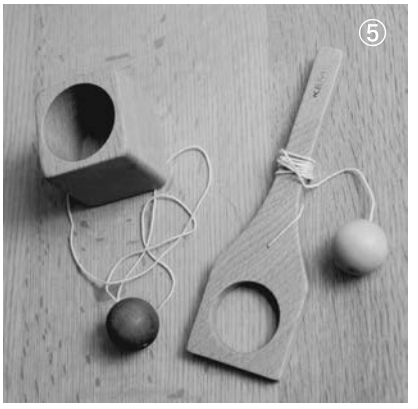
発見と学びのある「部屋の中の森林」

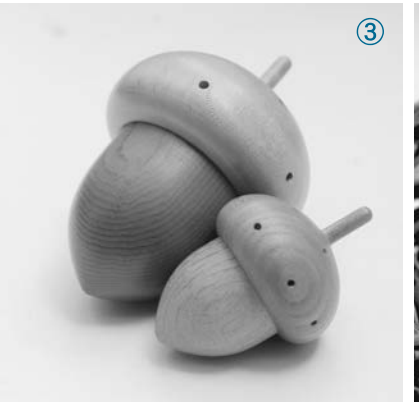
おもちゃとは、遊びの道具である。その道具を使って遊びを作りだし、広げてゆくのが使い手である。良いおもちゃとは、使い手がたくさんの遊びを創造し、広げてゆくことの出来る、懐の深いおもちゃだ。それは、様々な発見を促し、豊かな感性を育む。

森林は日本の文化に欠かせない。子どもは身近な物から遊びの道具「おもちゃ」を創り出し、それは多くの場合木だった。そのおもちゃは長きに渡って子ども達のセンスオブワンダーの源だったのだろう。木の感触を忘れない、日本の森林文化を継承してゆくためにも、現在において木のおもちゃが果たす役割は大きいのではないかと思う。

ふとすると、私たちは室内での遊びを軽視しがちになるが、様々な発見と成長を促すのは野外の森林だけではない。おそらく、部屋の中にある森林である木のおもちゃも、子どもたちに様々な成長のタネを与えてくれているはずだ。

KEM
札幌近郊で手に入る木のおもちゃ


⑤


③

①

⑥

KEM
子供達とかつて子供だった人への贈りもの

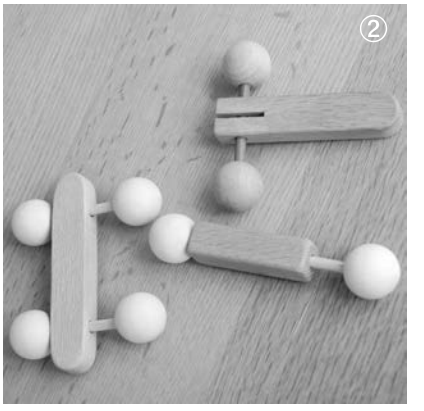
①木のタマゴ。木の種類によって手触りも重さも違う。様々な木を感じる逸品。

②⑥こだわりのガラガラシリーズ。お母さんが赤ちゃんに与えるシンプルな愛情のために。

③ドングリコロコロは独楽として遊ばなくてもかわいいし動きも面白い。

④タマコロファミリーは関節の動くお人形。実現するのは難しかったのだとか。

⑤ケンダマのような素朴なな遊びのおもちゃに奥深さがある。


②

KEMの製品は道内あちこちでご覧いただけます。

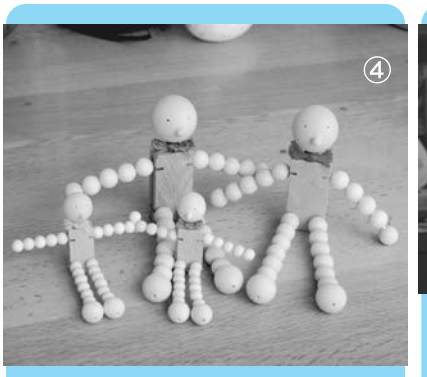
大丸藤井セントラル（札幌）
tel.011-231-1131

クラフトスタジオ
（新千歳空港ターミナルビル2F）
tel.0123-46-5732

そのほか、HPからもご覧いただけます。
www.h3.dion.ne.jp/~kem

製品等のお問い合わせは下記までどうぞ。

KEM工房
〒062-0053
札幌市豊平区月寒東3条19丁目20-11
tel/fax.011-855-5510


④

KEM工房主宰
煙山 泰子さん

道産子の煙山さんは木のおもちゃデザイナー。子どもと一緒にいて、口を出すことも好き。

もっともっとシンプルな根元的な大切さがある。

学生時代に木のおもちゃに出会い、初めて自分でも木のおもちゃを作った。そのときに仲間が喜んでくれたことと、そのおもちゃで遊んだときの楽しさを伝えたいから今でも工房を続けている。1979年に若くして「KEM工房」を開いてから今に至るまで、素朴なその気持ちは変わっていないと言う。札幌市内にアトリエを持つ煙山さんがデザインする木のおもちゃは、製品化されて量産され、流通している点で先進的だ。シンプルな形と機能にこだわるのは、お求めやすい値段を実現するためでもあるが、込めた気持ちを素直に伝えたいためだそうだ。カラクリが少なく、子どもでも仕組みが分かるようなシンプルさが煙山さんのこだわりだ。

「人間はずっと昔から木と共にあったと思うのね。だから、初めて触った木でもずっと昔から知っているような感覚になるんじゃないかな」 木に触れることで、昔の素直な気持ちに戻れるかもしれない。それは、空の青さを感じたり、自分の周りに色んな生き物が生きていることを感じられたり、そういう基本的な気持ち。

そして、自身がライフワークにしているガラガラも、はるか昔から世界中で使われている道具であり、親の子に捧げる変わらぬ愛情が見て取れる。そこには今も昔も変わらない根元的で素朴で、大切にしたい感情がある。自分がこだわって伝えたいのは、その根元的で素朴な感情なのだと語る。

また、自分が育った土地の木と、様々な木の特性を知って作られたおもちゃは、五感に別々の語りかけをする。それは、視覚以外の感覚が育ちきらないと言われる現代社会において、子ども達に生きる力に必要な五感を育てるために重要だと言う。

自分のおもちゃに触れることによって木を好きになって欲しい。それが入り口で、木のいろんな事を知ることが出来る。小難しいことはいらなくて「あ、木が好きだな」と思ってくれたらそこから知識も、森林の環境問題への意識も、広がりができると思う。木のおもちゃに寄せる思いも優しく、素直だった。

札幌近郊で手に入る木のおもちゃ ウッドクラフト「AU・AU」

WOOD CRAFT
AU・AU

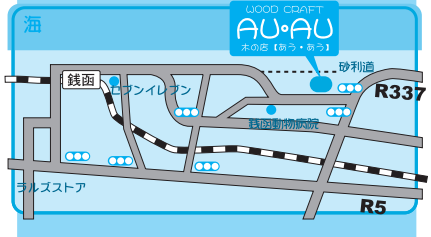
木の店【あう・あう】

①②⑥木の音に注目したおもちゃ。いわゆる鳴り物は木の種類によって音が違うが、すべての音が温かい。

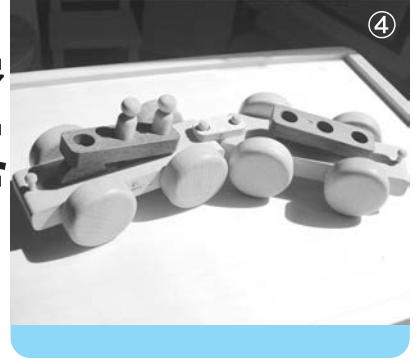
③おもちゃだけではなく、木の色と質感の違いに注目している。組み木のレリーフはそのひとつ。これは人魚姫。

④木の手触りは子どもに伝えたいことのひとつ。その優しさがフォルムに表れている。

⑤ゲーム感覚で楽しめるバランスゲーム「ユラユラ」難易度が変えられ、大人でも楽しめる。



小樽市銭函3丁目183
tel/fax. 0134-62-2500
URL: www.k2.dion.ne.jp/~woodauau/
銭函駅から徒歩で15～20分
日・月/定休　10:00～18:00



AU・AU店主
運野 淳さん

手作りで木の香りが漂うギャラリーはできたばかり。自身は子どもの野外教育にもボランティアで関わっている。東京出身。

木が好きな人と木の文化を大切に育てたい。

「木の手触りを知っていて欲しいんです」温かい笑顔で迎えてくれた運野さんに、まずは木のおもちゃを作っている理由を聞いた。木の温かい手触り、鉄やプラスチックと違い、温かく触っているとぬくもりが伝わって馴染んでいく。そんな手触りを子どもの頃から覚えておいて欲しいのが自分の願いだと言う。運野さんは、銭函の海岸に近い、静かなアトリエで1991年から活動を続ける木のおもちゃ作家だ。手触りを大事にするおもちゃの作り手のこだわりとして、色を極力使わない、無垢の地を活かした作品作りをしている。確かに、展示のおもちゃは色が塗布されておらず、感触は無垢の素材に思える。ここまで磨き上げるのは大変な手間だろう。使う塗料に関しても、厳しい基準をくぐり抜けた安全な物を国外で見つけて来るなど厳選して使用している。しかも、色を塗った後も木の感触はしっかりと残っていた。もう一つ、これは自然にそうなっていったそうだが、鳴り物のおもちゃが多い。乳児が持つ、いわゆるガラガラも、木の軟らかい音を聞かせてあげたいという思いから作られた。これらは樹種によっても音が違う。木にもいろんな種類があることを自然に分かってもらいたい。アンバランスな台の上に積み木を積んでいくおもちゃも、崩れる時のカタルシスと共に音も感じて欲しい。木の感触や音など、室内でも五感を使って様々な木を識ることができると話す。

北海道の木を使うことについては北海道に住んでいる人だから北海道で生まれたものを使いたいという、地域に住む人として普通の願いがある。地材地消こそ必要な姿だ。森林も、目先の利益を求めては荒廃させるようなものではなく、百年の単位で人と木が長い時間の中でしっかり結びついた森林になると良い。「自分が木が好きだから、そんな人が増えて欲しい。それと、日本はずっと木の文化ですよね。それを覚えておいて、日本の森林を大事にしてほしいですね」と、運野さんは木のおもちゃに託す希望を静かに語った。